

地域を支え、共に生きる

復興にシニアの力

震災遺構の保存・活用を働き掛け

2008年に起こった岩手・宮城内陸地震による栗駒山の荒砥沢ダム(栗原市栗駒)上流の崩落は、世界的に珍しい地形を生み出した。翌年には「日本の地質100選」に選ば

れ、地質学的にも価値が認められている。「私たちの会は現場を荒砥沢キャニオンと呼び、できるだけ現状で保存し、ジオパーク認定を目指す住民組織です」と大場会長。

大場会長は、ダムのそばで温泉宿泊施設を営み、地震では山体崩壊の一部始終を目撃した。震災後は多くの学者を崩落現場へ案内し、学術の一端を提供

する他、一緒に行政などへ保存と活用を働き掛けしている。「宿泊施設では、現場の写真や研究結果を公開しています。団体のお客様にはスライドでお見せすることも。崩落地は防災教育や観光に生かし、地域復興につなげたい」と話している。



NPO法人 荒砥沢キャニオンを守る会
会長 大場武雄さん(74)

「多くの人に崩落地を見てほしい、震災を記憶にとめてもらいたい」と語る大場会長



国内最大級の地滑りといわれる荒砥沢ダム上流の崩落地(2009年)



【山武温泉 さくらの湯】
荒砥沢ダム麓の日帰り・宿泊温泉施設。食事可。裏手の山からは崩落地が一望できる。見学希望者は温泉フロントへ。TEL0228-47-2111(栗原市栗駒文字荒砥沢45-27)

地域内で継続サポートを



津谷地区社協生活支援センター 事務局長
芳賀 繁さん(64)

「温泉や買い物でリフレッシュしてもらいたい」と芳賀さん

気仙沼市本吉町津谷地区は津波被害エリア。震災直後から多くの支援があったが、「いつまでも外からの支援に頼っているわけにはいかない」と、津谷地区社会福祉協議会では2011年11月に生活支援センターを設置。仮設住宅暮らしや在宅避難をしている人を長期的に支援しよう、と20人ほどの地域住民が立ち上がった。

センターの開設当初から事務局長を務める芳賀さんは、「地域内の助け合い、支え合いこそが大事」と説明する。津波で家を失った若者や経済力のある人は比較的早く自立していき、一方、高齢者や一人暮らしの人は、仮設住宅暮らしや在宅避難



仮設住宅でのふれあいサロン

を続けざるを得なく、孤立する例も少なくない。こうした状況から、高齢者に少しでも前向きな気持ちになってもらえるような企画を考案。その一つが、移動ミニデイサービスだ。一関市までマイクローバスで行き、日帰り温泉を楽しんでもらう。津谷地区にある4カ所の仮設住宅を訪問し、ゲームや会話で交流を図る「ふれあいサロン」も好評だ。今後は自家用車を持つていない人のために、登米市や石巻市への買い物ツアーを予定している。